

書 評

青野篤子・森永康子・土肥伊都子著

『ジェンダーの心理学』

丸 島 令 子

本書は三人の社会心理学の研究者により「女性と男性についての思いこみ」、その凝り固まった考えがどのように形成され、何をもたらしたか、鶏と卵の関係にも似た難題を「科学する」意欲に満ちた良書である。比較的小ぶりの書物であるが、一読して面白く、「男女平等の考え方も、心理学の研究領域や研究方法も少しずつ異なる」著者らにより分担執筆された各章はそれぞれ自らの研究データや心理学の理論がちりばめられ、また効果的に「コラム」や研究紹介のページを割いて、論旨がわかりやすく明快に示されている。さらに「本書の構成を表す概念図」が冒頭に示され、各章は論理一貫して概念図に沿って論じられるための役割を持ち、読後、読者は本書から自分自身の考えや行動をまとめ発展させようと動機づけられるような巧みな意図が感じられる。なるほど、このような書物の構成のために、著者らは執筆中、電子メールの交換は欠かせなく、多い時で1日十数件のメールが飛び交ったという。このように各章は大変力作であるため、本書の構成に沿って簡潔に内容を紹介していくことにする。

まず前述の構成図は手書きの少々ユーモラスにも見えるが、図の真中に「男女の思いこみ」が岩のように横たわり、それを中心に縦横二分され、左右が「個人の領域」と「社会の領域」とされ、上下に二分された下半分が「形成過程」、上半分が「影響、変容過程」として示されている。そのどれにも「男女の思いこみ」の岩がかかっていることがわかる。著者らはこの図の中に各章の標題

を配置して、章と章の関連性が視覚的に把握されるように考えている。

第1章は形成過程の「個人の領域」と「社会の領域」の両方にかかわる基礎的内容として「女性」とは「男性」とは、と題されて青野篤子氏によって執筆されている。生物学的性—セックスについては、性の分化に関する必要最低限の知識が記述され、もともと男性、女性の生物学的性の分化は我々が思っているほど明瞭なものではなく、連続性を持ち曖昧さをはらんでいる点が指摘されている。第二節以降の社会的性—ジェンダーについてのほうがむしろ本章では精力が注がれて論議されている。そこでは、人間社会では単に人間としてではなく、男性か女性としてこの世に性を受け、もともと連続性があったものを全く別の種類のものと見なし、同化（類似性や同質性）や対比（差異や異質性）の強調に余念がなく、二分法に至ってはそれぞれに正反対の性質が付与される傾向がもたらされた過程が論議されている。

こうして人間社会では太古から雌雄の生物学的イメージが男性と女性の意味づけ（ジェンダー）をされ、それが連続として受け継がれて、地位としてのジェンダーを生じ、歴然とした格差をもたらし続けてきたと指摘されている。このようなジェンダーは男女それぞれに相応しい社会的期待としての側面をもたらし、近代に至って行動や特性のセットである性役割概念が導かれたことが述べられている。有名なパーソンズとバールズ（Parsons & Bales, 1956）の女性と男性に対する「表出性／道具性」やベイカン（Bakan, 1966）の「共同性／作動性」、またわが国の柏木（1972）による女性役割の「美と従順」、男性役割の「知性と行動」について解説され、これらが本書のテーマに盛り込まれることが示されている。そして本書ではジェンダーの語義を「社会的性」として取り扱うとされた。

こうしたジェンダーは個人によって“演じられる”側面があり、個人はセックスとジェンダーを組み込んで自分らしさを形成するが、社会的要因によるジェンダーの型づけがそれを促進する点が指摘されている。最後に「女らしさ」「男らしさ」のジェンダー論から「自分らしさ」という人間の性をより多面的

に認識しようとしたベム (Bem, 1974) のアンドロジニー論や伊藤 (1978) の MHF スケールの研究が論議され、これらも次章から展開されていくことが示唆されている。

第2章と3章は土肥伊都子氏が執筆し、「男女の思いこみ」については2章で個人の領域から、第3章は社会の領域から、いかにそうした思いこみが構造化され、単純化され、一般化されていくか論議されている。このような思いこみが「ジェンダー・ステレオタイプ」と呼ばれるとされた。土肥氏自身の研究結果 (1995) によると、ジェンダー・ステレオタイプは過去20年間でも変化は小さいことが明らかにされている。つまり男性的特性とされる、道具性、作動性、行動性、知性、女性的特性とされる、表出性、共同性、従順と美はいまでも人々の間で頑なに共有されている信念であるらしい。

さらに土肥氏はこうしたジェンダー・ステレオタイプは、個人が他者について理解しようとする際の思考の枠組みによるものとして、そのメカニズムを「スキーマ (schema)」の概念によって詳しく説明していて、本章の中でも最も興味深い。つまり人はジェンダー・スキーマ (男女を区別して思考するための枠組み) を使って他者を理解する判断基準とすることが解説され、その結果、ジェンダー・スキーマを強く持つ場合、男性性、女性性を強く意識したステレオタイプ化した見方をする心的過程が理解される。最後にジェンダー・ステレオタイプの形成のいくつかの歪みについて論議されている。それらは「サンプリング・エラー」、「誤った関連づけ」、「サブタイプ化」、「初期値としての働き」というようにまとめられて論議されている。つまり人はいかに心の中で恣意的とも言えるほど自在にジェンダー・ステレオタイプを形成し、それを維持しようとするかのメカニズムが納得させられる。そこには「自分可愛さ」の自己高揚動機による認知の歪みが作用していることも指摘されている。

第3章で土肥氏は、いかにいろいろな集団 (社会) の中で影響を受けながらジェンダー・ステレオタイプが形成され維持されていくかを豊富な社会心理学の理論を紹介しながら原理的な説明をしている。欧米諸国や日本では共通して

近代産業社会という社会制度を持ち、「男は仕事」、「女は家庭」の性別役割分業に基づくジェンダー・ステレオタイプの合理的なパーソナリティを男女に期待し、それが集団全体に適用されて現状の「説明原理」として働いてきたことが論議され、ここに「鶏と卵の関係」の問題の手がかりが認識されるとされた。しかしそうした中で今日変化の兆しが無いわけでもなく、ジェンダー・ステレオタイプの内容の変化は小さいが、それを人々が支持する率の低下傾向が指摘されている。

本章でもう一つ興味深い点は、土肥氏自身の研究結果から、親密な一对の男女の関係において最もジェンダー・ステレオタイプに従った行動をとることが示唆されていることである。これについて土肥氏は、大勢の男女での役割分担よりも、一人ずつしかいない男女での役割分担の方が相手の性に対する期待が高まるのではないか、あるいは無難に社会一般に流布しているジェンダー・ステレオタイプからはみ出さないように親密な関係を結ぶと考察しているが、果たしてそれだけであろうか。何かより根源的なことがあるのではないかと気になるところである。

次の第4章と5章では、森永康子氏がジェンダー・ステレオタイプへの影響要因や、変化過程について執筆している。森永氏は4章で、子どものジェンダー・ステレオタイプ化について詳細に論議していて興味深い。それによると、子どものジェンダー・ステレオタイプの知識は、おもちゃ、服装、職業や行動などさまざまな分野にわたり、3～5歳頃急増し、就学前頃に非常に高いレベルに達するという。その時期はまた子どもがジェンダーの恒常性（男の子も女の子も時間や状況が変わっても性別が変わらない）を理解するおおよその段階にあるらしい（コールバーク、1979）。こうした幼い子どもの持っているステレオタイプは年長の子どもや大人よりも驚くほどきっちりしたものであるらしい。自分自身の幼い頃の記憶をたどると、恐ろしい怪物の話や胸踊る冒険物語に恐れながらも驚喜したり、美しい花畑や優しい女の人にうっとりとしたそうした体験は今に至るジェンダー・ステレオタイプに繋がる知識を培っていたの

かと思う。ともあれ心理学では子どものジェンダー化は環境からのかかわりや、子ども自身による観察の過程を経て実現される社会学習論や、子どもの知的な発達がジェンダー化の基礎となる認知発達論から説明されるとされた。

このような子どものジェンダー・ステレオタイプは就学以降徐々に柔軟的になるという。青年期になるとジェンダー・ステレオタイプに反発し距離を置きながらも、この時期に高まる自己意識に対処する方法として、自分のよく知っているステレオタイプに立ちかえり合わせてしまうことが指摘されている。結局は「自分らしさ」やアイデンティティを求める青年は「自分らしさ」と「男らしさ」「女らしさ」との間で葛藤を生むことが第5章で詳しく論議されている。また男性にとっても女性にとっても、青年期ではジェンダー・ステレオタイプは現実のものとなって、それぞれの属性の一部となり定着する点を、ピグマリオン効果（なにかを信じ思いつづければやがてそれが現実のものになっていく）と呼ばれる考えから解説されている。例えば「男子は理系」「女子は文系」という学業に関するステレオタイプにより、数学で優秀な成績を修める女子が教師などから「女の子なのにすごいね」と言われたりすると、「女子に数学ができることは変なのかもしれない」というメッセージを受けとって女の子であるために、理数系へ進まないかも知れない。反対に男子の場合は「さすが男の子」と褒められ、男性であることが証明できる。同じようなことは「女性は結婚したら会社を辞めるもの」、「女性はスポーツには向かない」もジェンダー・ステレオタイプがピグマリオン効果によって現実のものになる過程として説明されている。このようにピグマリオン効果によって、ジェンダー・ステレオタイプに“ノル”場合と、積極的にステレオタイプに沿った行動をする「演じる」側面も論議されている。かくして「町内会長とその妻」や「白衣の天使と正義の味方」も演じられて、社会的相互作用の中でステレオタイプが再生産されていくことが指摘されている。最後に森永氏はジェンダー・ステレオタイプと個人の社会的適応の問題を取り上げ、「男らしく」の末路は「ぬれ落ち葉」や「粗大ゴミ」、そして中高年男性の自殺率の増加傾向との関連性と、それに対し

て「女らしさ」を受容した結果、あるいは「女らしさ」と「自分らしさ」の葛藤によってもたらされる女性の低い自尊感情やうつ病の有病率の増加とを問題提起している。そして“ジェンダー・ステレオタイプにまみれながら生きていくしかないのだろうか”と問われている。ただし、「女性の幸せ」が職業を持つ、働くことへの意欲と関連していることが森永氏自身の研究結果からも示唆されている。

第6章は再び青野篤子氏が伝統的な心理学からフェミニズムの影響を受けるようになった以降の心理学の研究動向について解説している。すなわち前者は男性を標準とした生物心理学的精神分析理論として知られ、女性は産み育てる性に閉じ込められ、母性が強調された母子関係論が展開され、ジェンダー・ステレオタイプの強化に寄与したことが示唆されている。その後、「男と女は違う」という性差研究に多大の関心が注がれた心理学のメタ分析の功罪が鋭く論議されている。この点の記述は心理学を研究する者にとっては常に留意すべきことであって、貴重な論述である。

次に青野氏は、フェミニズムの影響を受けた1970年代以降の心理学が、ジェンダーの視点から主として女性の研究者によって女性特有の人間モデルが提供された潮流を解説し、代表的なものにホーナー（Homer, 1972）の「成功不安」の概念、ギリガン（Gilligan, 1986）による女性の道徳性の発達説、ベム（Bem, 1974）のアンドロジニー説をあげて論議している。しかしこれらはその後のいくつかの追試的研究により女性特有のものという観点が疑問視されたり、スケールの難点が見出されたりしていることが指摘されている。しかるにこれら一世を風靡した残照はまたジェンダー・ステレオタイプを補強したことが解説されている。

最終章は三人の著者らの共同執筆によるものと考えられる。ここではジェンダー・ステレオタイプの変容について社会と個人の各領域について、極めて理論的かつ具体的に提言されている。社会のその変容の影響要因としては、「反証情報」の効果に関していくつかのモデルが示されて説明され、いかに女性マ

ラソンランナーがジェンダー・ステレオタイプの変容に寄与したかが理解される。また多重役割によるステレオタイプの緩和論も分かりやすい。著者らは個人に対しては、「今日からあなたにできること」と題して、具体的に提言している。つまり「メタ認知を持つこと」は、このようなテキストを勉強することや、ジェンダー学の必要性を理解させる。「自分の殻を破る」「アンドロジニーを確立しよう」などは個としてのアイデンティティの確立、男性性も女性性も兼ね備えた人格、強くもあり、優しくもあり、生物的な自分の性を受容してそれらをうまく統合した意味の「ジェンダー・アイデンティティ」（土肥、1995、1996）の人間像が示唆されている。そうした個人には思いこみの基となるカテゴリーとしては「自分」と「自分以外」だけが残り、ジェンダーや社会階層、職業、民族などのカテゴリーが無くなり、ステレオタイプから自由になることが明快に解説されている。

以上のように本書を読み解いていったのだが、もっといろいろな読み方があるであろう。例えば三人のうち誰かひとりの著者のメッセージを中心に他の著者の観点や研究を理解することもできよう。

ここ二、三年、ジェンダーに関する書物が相次いで出版され、今私の机上にも数冊ある。その中には本書の題名と同じ『ジェンダーの心理学』（東清和・小倉千加子編、早稲田大学出版部、2000年10月出版）もある。これら著者の殆どが心理学者もしくは近接領域の研究者である。また本書で提示されたジェンダーに関する理論や学説やデータも共通して提示されているものが多い。こういった中で、本書は「男女の思いこみ」を科学する”ことに成功したユニークな質の高い専門書と考えられる。人間科学に関心を持つ専門家はもちろんのこと、学生や一般の男女も「メタ認知」の向上のために有益な書物となるう。

今回この評論に当たった執筆者自身は臨床心理学の分野に関係しており、日頃ジェンダー・ステレオタイプによって傷ついたり、その呪縛に喘いで問題を持つ人々と、またその被害を受けて心の歪みに押しつぶされそうになっている子どもたちにかかわっていると、本書を読んでジェンダーについてより根源的

な問題を探求したい気持ちに駆られる。それは何であろうか。著者らは第7章の冒頭で、「オス・メスという雌雄性は進化の過程で獲得した重要な特性であり、ヒトという種の存続のためにはなくてはならないものである」と述べており、しかしそれが社会的役割つまりジェンダーと結びついたところから問題、歪みが発生したと指摘している。人間は進化の必然性の過程を経て、今日のジェンダー・ステレオタイプの文化を築いてきたともいえるが、ジェンダー・ステレオタイプに至る諸悪の根源とも考えられる結婚制度や家族については、その変容の兆しが認識されてきている。われわれは次なる進化のためか、あるいは種の保存のためか、この辺で仕切り直しをして、人間のオスとメスと子どもを視野において、本書ではあまり触れられなかったセクシュアリティの心理とジェンダーとの関係について考えることも必要かと思われた。

(ミネルヴァ書房、1999年12月、165頁、本体2,000円＋税)